

手賀沼が海だったころ

第3回松ヶ崎城祭りを開催！



1. 今回の松ヶ崎城祭りは

東日本大震災があった昨年度は除染と音楽の調べを行った関係で、松ヶ崎城祭りとしては2010年度に続き3回目になりますが、当会主催の松ヶ崎城まつりは、2012年11月18日(日)午前10時から午後4時前まで行われました。

風が強かったですが、何はともあれ再開できてよかったです。

2. 祭り当日の様子

午前10時からのオープニングでは、柳沢副会長の開会宣言、森会長のあいさつの後、オープニングでアルペジオさんのフルート、バイオリンによる懐かしい曲の演奏があり、ノスタルジックな曲に皆聞き入っていました。アルペジオさんのフルート、バイオリンで、懐かしい曲の演奏が行われました。



<アルペジオさんの演奏>

二番手は呼魂太鼓さん。前回同様に大勢で勇ましい太鼓、鉦の音と巧みなばちさばき、大利根激流太鼓はオリジナルの流れるリズムが印象的。最後のアンコール曲では大しゃもじで「めしとる」パフォーマンスもあり、盛り上げてくれました。



<勇壮な呼魂太鼓>

午前、午後2回の見学会には、のべ40人くらいの方が参加されました。今年は「柏の歴史遺産 松ヶ崎城跡」というDVDを作成しましたが、それは松ヶ崎城跡を女性リポーターがまわるというもの。同じ行程をたどって見学会を行いました。

古い大正頃の演歌や三味線を弾きがたりの茗荷さん。以前弁天様の使いの噺がありましたが、今回は「増尾の狐」という不思議噺を披露して頂きました。

それから午後は、野外ゲームとして、ビンゴゲームを行いました。数字ではなく、松ヶ崎城に関連あるキーワード

ードを予め選び、自分で書き込むタイプのもの。お子さんからお年寄りまで26名の参加がありました。

尺八は輝籥さん。尺八の構造など詳しい説明もありました。



<疎開支援の会の皆さん>

3. 地域の人々や皆さんと

朝方、マルキン松ヶ崎店の社員の方々には清掃をして頂き、感謝です。

今回アジアの小物・雑貨を扱う松葉町のアーシアンさんのほか、疎開支援の会からも出店がありました。「相馬きゅうり漬」や菊の切花など、福島からの方々には少しはお力になれたでしょうか。実は松ヶ崎城祭りのことは、東京新聞の昨年11月27日朝刊に疎開支援の会への取材記事という形で載っていました。

その他、カンボジアのコーヒー、南増尾の農家から仕入れた芋を焼き芋にしたのも好評でした。

当会の今年度の活動実績と来年度の予定

【今年度】総会/講演会(4/22)、松ヶ崎城紹介DVD制作、植物の観察会(7/7)、松ヶ崎城祭り(11/18)、歴楽講座や見学会など

【来年度】2013年4月21日総会/講演会、松ヶ崎城周辺遺跡などのMAP制作、その他今年度とほぼ同じ活動を継続する予定

総会後の講演会：「豊四季の開墾(仮題)」を予定。乞うご期待！

◆日時：2013年4月21日13時45分～(13時15分開場) 場所：柏中央公民館講堂、講師：末武芳一氏

松ヶ崎城跡東南斜面が急傾斜地として危険地帯に指定され、擁壁工事がされつつあります。当会としては、遺跡や環境への影響を少なくするよう関係先に折衝中です。

柏飛行場・フィリピン戦線関連座談会



当会では戦時中に関連した講演会、写真展示などを行ってきましたが、2012年10月6日、市川市真間にて柏飛行場・フィリピン戦線関連の当会主催の座談会を行いました。なおご出席の黒瀬純造さん、藤木泰夫さん、高井英一さんから画像や資料をご提供頂きました。

1. 縁あって開いた座談会

今回の座談会の開催場所は、市川真間の話飲茶屋つぎはしという喫茶店です。この座談会は、参加者の元軍人の方と懇意にしている市川市在住の方が仲介してくれました。その方と市川真間の喫茶店つぎはしのオーナーにご協力頂きました。

座談会に参加されたのは、元軍人では柏飛行場に駐屯していた陸軍飛行第一戦隊・整備隊の元大尉黒瀬純造さん、同機関工手・幹部候補生の藤木泰夫さん、柏の根戸の東部 83 部隊にいた忍田吉正さん（戦争体験を語る会世話人）のほか、旧満州駐屯東部 6 部隊で戦後シベリアに抑留された高井英一さん、海軍軍属から応召し陸軍本土決戦部隊に所属した北村外史郎さん、予科練出身で大井海軍航空隊に所属した福島俊男さんの 6 名。当会からは森会長、川上幹事、山野辺幹事が参加、他に田嶋昌治先生や市川の NPO 法人の方など。

司会は元アナウンサーの富澤美奈子さん（写真）で、録画・録音は染谷毅さん。



< “つぎはし” の前にて >

冒頭軍隊での所属、経歴など自己紹介を行いました。当会の山野辺幹事からは戦時中疎開した増尾での体験談、田嶋先生からはお身内の出征の話などがありました。

以下、柏飛行場や飛行第一戦隊が移動した先のフィリピン戦線に関する部分を抜粋します。

2. 飛行第一戦隊について

富澤さん（司会）

まず、柏飛行場関連の方のお話を伺いたいと思いますけれども、飛行第一戦隊の柏飛行場に居た 1943 年当時、フィリピンレイテ攻撃戦の前後ではどのようなことだったのかをお聞きしたいんですけれども、よろしいでしょうか。黒瀬さん。

黒瀬さん

詳しいこと聞くねえ。ここに飛行第一戦隊の歴史ってあるんです。これによりますと、うちの戦隊はラバウルに行きまして、ラバウルってお分かりですよね、ソロモン群島の中にあるんですが。最先端にガダルカナルなんかもあるんです。そのラバウルの航空戦をやって、それで飛行機をあとから来る部隊に渡して船で、そのころはまだ船で帰れたです。パイロット全部帰りました。私は士官学校出まして陸軍少尉になって、どこそこ行けっていわれまして飛行第一戦隊。どこに

居るのかっていったら、今船の中、南洋を走ってるという。そこに赴任できないので取りあえず兄弟戦隊の十一戦隊というのがありまして、それと一戦隊とは飛行団を組んでいたんです。同じ飛行団の中に 2 戦隊ありまして、その部隊が大阪に帰ってるからそこに行け。ということで私は居候しまして大阪の大正飛行場に一ヶ月居ました。その内うちの部隊が帰って来て、また一ヶ月。

そこで訓練を終わって飛行機を変えて、新しい飛行機になって、満州のジャムスに行きました。満州のジャムスに行って寒くて寒くて。

（略）大変なところ来たのと、満州の地図見ていただけたら分かります、北満ですから。相手はソ連だし、いつやられるか分からない。大変と思ったらちょうど私たち行って一ヶ月で、また軍命令来まして柏飛行場に帰れと。それで来たのが柏の飛行場なんです。ですから、昭和 18 年の暮れだと思えます、柏の飛行場に来たのは。

それで柏の飛行場で隼という飛行機で訓練しまして、それが終わって途中で、また雁の巣の飛行場行きました、九州です。B29 が来るというので行けということで、雁の巣の飛行場行ってしばらく待機していましたが、来そうにないということでまた柏に帰って来ました。半年もしないうちにまた機種

改正、どんどん新しい飛行機できました、みんな中島飛行機の戦闘機ですけれど。私の部隊は戦闘部隊で、単座飛行機です。一人きりっきゃ乗れませんから。それで四式戦疾風というのに、最後変えたんです。それで四式戦に乗って、これはまた、潤滑油、オイルがよく漏れましてね。故障が多い飛行機だったんですけれども、馬力は疾風のほうが2倍くらいありましたから、すごい1,800馬力ぐらいありましたから、一つのエンジン。

それで訓練しまして、その中にここに写真一つありますけれど、私の親友だった大石という男が、薄暮飛行やっていると墜落して殉職しました。それが今地図がありましたね、飛行場の地図。この滑走路、こっち（北へ）向けて離陸したんです。ここにちょっと小高いところがありまして、その地面に飛行機が激突したわけです。それでバーンと真っ赤になって大きな音がしましたから、これは事故だって、すぐ車で駆けつけたんです。私責任者で行きましてね。そうしたら、民家の手前に突っ込んで行って、飛行機逆さまになってるんですけど、エンジン、プロペラ無いんです。で行ったらエンジンはこっち、プロペラはこっち。それで民家は異常ないのかと思ったら、民家に穴があいているんです、スポッと。雨戸が。中は夫婦で、老夫婦2人暮らしてた。そこに突っ込んで行って。飛行機は突っ込まなかったけれど、ラジエーターが突っ込んで入ったら天井からオイルがツブツブツブ漏れてまして、本人が居ないんです、パイロットが。そうしたら1軒うちを抜いて

奥に落ちていました。もう頭グチャグチャになってました。お2人は片一方はトイレ、片一方は台所。夕食直後だったんで、2人とも分かれてたんで、命に別条はなかったんです。あとは軍が補償したと思いますけれども、そういうことがありました。それが大石というのが、そこで殉職しました。

ほかにも、訓練中に事故は随分ありました。(略)

それで、話があと先になりましたが、結局10月のフィリピンのレイテ島にマッカーサーが上陸するというところで、それまでに間に合うように捷号作戦というのがあったんですけれど。上海を経由しまして、台湾経由でフィリピンの方、マルコットという飛行場に着きました。そのときには、景気良かったです。だいたい2,000機くらい行っただけです、日本から航空隊。だから右も左も全部飛行機で、日本の飛行機で。ゲーッとね。歌に「ああ堂々の輸送船」ってありますが、「ああ堂々の航空隊」です。これじゃ負けないと思っていました。行ったのが、1週間でもなくなっちゃった。たった1週間で。だからアメリカの物量はいかに大きいか、ということがお察し頂けると思うんですけれど。

それでマルコットの飛行場に行って、その18年の暮れから結局19年の10月、レイテ作戦に行くまでの間が、我々の柏飛行場の生活だったんです。もうとにかく私も独身でしたし、兵隊さんはもちろん缶詰でしたから。私はここで整備班長という名前いただいているんですけど、(戦隊に)3個中隊ありまして、だいたい40機から42~3

機くらい飛行機があったんです。パイロットはだいたいそれくらい居まして、整備班は1個にだいたい50人から60人。私はその長をして居たわけです。第1、第2、第3と3つ班がありまして、その上に整備隊長というのがありました、全部を統括する。それで飛行隊は飛行隊長が同じようにありまして、その上に戦隊長というか、部隊長が居らっしゃいました。その部隊長は私が赴任したときは陸士の46期で、私が56期ですからちょうど10年先輩だったんです。少佐です。ところがもうフィリピンでドンドン、ドンドン亡くなっちゃって、部隊長が。もう高萩に今度帰って来たときは、部隊長は2期先輩です。私56期ですから、54期生が戦隊長です。だから兄貴みたいに思ってた人が、もう部隊長という立場で。(略)



<中尉任官当時の黒瀬さん>
(画像提供：黒瀬純造氏)

3. 柏飛行場での軍隊生活

富澤さん(司会)

黒瀬さんの先ほどのお話の中にもあったんですけど、戦闘機の機種変更の話がありましたが、一式戦闘機の隼から四式戦闘機の疾風への改編がありましたよね、1944年4月ごろにその改編

を行ってると思いますが、それはスムーズにいったのでしょうか。例えば故障があったりとか。

黒瀬さん

スムーズにいきません。(略) 隼のI型、II型というのはいろいろ問題はあったけれど、非常に優秀な飛行機です。で航続距離がものすごく長いんです。ただ火力が少ない。鉄砲がね。



<飛行戦隊の整備班>
(画像提供: 黒瀬純造氏)

(略) どんどん、どんどん、改良していくわけですから、向こうも。その改良の競争なんです。それで変えたのはいいんですけど、オイル漏れが多くて。(略)



藤木さん

(略) 柏の航空隊で一番嫌だったのが、夜間飛行の訓練で野田の町へ上空に昇るつもりが下に行ったらしいの。それで野田の町の中突っ込んで大変だったことがある。

それからもう一つは、柏の飛行場で、今亡くなっちゃったんですけど、杉少尉という人が、「藤木幹部候補生ちょっと来い」というから行ったの。そうしたら、四式戦の飛行機に乗っかって言うの。操縦できないのになんでかなって思ったら、操縦士の後ろに乗っかって計器

飛行っていうので、柏の飛行場の上を四式戦に初めて乗っかって、グルーッと回って、一番初めて飛行機の後ろに乗ったとき、滑走路まで行って走り出す前、これ上行ったから落ちないかって思っていていやだなんて思ったんだけど、その内、バーってすごい勢いで走りだしているうちに、そういう怖さ忘れちゃって、そうして暫くしたらバーって上にあがって、柏飛行場の上を回って、ずっと畑でしょ。夏で女の人がきれいな日傘さして歩いているのなんか見えるんだ。それで着陸したときは何かホッとしちゃって。でも、四式戦に操縦士じゃなくて乗ったっていうのあまり無いんじゃないですかね。そしたら、その少尉はフィリピンで戦死しちゃってね。黒瀬さんの話聞いていると、何かいろいろ思い出しちゃって、ショックだね。

4. フィリピン戦線

黒瀬さん

(略) 私が派遣されたのは、このリパって飛行場です。ここで派遣隊長で居りました。(略) それで昭和19年の10月24日、さっき言った捷一号作戦というのありまして、一斉に陸海軍で、レイテに攻撃かけたんです、向こうもこうあがって。私はここ(リパ)に居たんですが、戦隊はここ(リパ)から出て、帰るときにこっち(レイテ)から、結構(距離が)ありました。ここ(レイテ島の東)にネグロス島って島あるんです。そこにマナブラっていう飛行場がありまして、今度は帰りはここ(マナブラ)にしたんですね。ここにも整備の派遣隊が行っておりました。ですか

らクラークとリパとマナブラと三ヶ所に散らばってそれぞれ我々みたいな若い隊長が兵隊を連れてやってたわけです。

それでさっきも話しましたように、約1週間というのはちょっと酷いけれど、まあ半月くらいの間でも飛行機無くなりました、もうほとんど駄目で。それで、私はこっち(ルソン島北部)へ帰って来いと。ここ(リパ)でもたもたしている間に、こっち(レイテ島方面)では戦闘やっておりますから、毎日。今度こっち(リパ)に来なくなっちゃったんです、ここ(リパ)は遠いから。こっち(マナブラ)の方が近いから。で、こうやってる内に、戦隊長が46期のベテランの戦隊長(松村俊輔少佐)だったんですけど、離陸するときに、今の民間機でも同じですけど、最初から離陸するときにチャット、きちっと止めないと、ずーっとレバー引いてあがったときに途中で修正できないんですね。戦闘機上がって行って横に飛行場こう飛行機ら並んでますから、その飛行機ぶつかっちゃって、ちょっと定位置間違ってる、そこで戦死をされてました。



<春日井敏郎大尉>
(画像提供: 黒瀬純造氏)

それで次に春日井大尉って53期の人が戦隊長になりました。なってその日にもう戦死です。

それで今度はもう飛行機も無くなるし、パイロットも死んじゃう。(略)

それから、春日井さん死んじゃったので、今度橋本さん(橋本重治大尉)が来たけど飛行機が無い、パイロット無い。内地帰ってきたわけですから、そのときにも柏の飛行場使っていると思うんですね。それでまた飛行機をもらって、またパイロットも新しいのもらって、(略)もうとにかく大学出て1年か、2年操縦訓練したのすぐ促成で、位は少尉とか何かになってますけど未熟なパイロット連れて橋本さんはまた帰って来たわけです。

それで行ったときに、(略)単独で突っ込んで戦死。もうバタバタバタ。もう飛行一戦隊の隊長になる人居なくなっちゃった。

それで兄弟戦隊の十一戦隊の四至本広之丞大尉、(略)私より2期先輩なんですけれども、部隊長で来ました。私はここ(リバ)に居まして、今度は敵が、これ(レイテ島の攻防)が終わって、今度はリングエンというの有名なところなんです。日本が大東亜戦争始めるときに上陸した所なんです。上陸しやすい所なんです。アメリカもまたここ来ちゃったんです、リングエン。ここから南下してマニラに向けてバーッと飛行部隊で南下している。

私はここ(リバ)、南に居るわけですから、軍命令で、「直ちに適當なる手段によって北部ツゲガラオに帰還すべし」って、ツゲガラオってのはここ(ルソン島の北)

なんです。「適當なる」っていうとどういうふうに思います? 「歩いて帰れ」っていうわけなんです。適當なる手段って何にも無いんです。行くときは飛行機や自動車ですって送ってくれるから簡単で、航空兵って歩くの苦手ですから。それでここ(リバ)からここ(ツゲガラオ)までなんと600キロあるんです、東京から神戸くらいまで。それで途中でゲリラ出ますから、で昼間は制空権とられてますから夜、夜歩くわけです。(略)でも3週間かかって踏破しました。(略)(内地帰還の兵員を)運んでいる飛行機が九七重って爆撃機なんですけれど、たった10人しか乗せられない、1機に。それが3機。(略)これで運んだ人数は67名。(以上、抜粋終わり)

その後黒瀬さんは台湾経由で内地帰還、藤木さんら飛行一戦隊の地上勤務者200名近くはフィリピン残留、歩兵部隊に編入され、残留者で復員できたのは21名でした。

5. 終戦時の状況など

各参加者に終戦時の状況を語って頂きましたが、忍田さんは初年兵教育が終わると同時に終戦、やっと家に帰れると思ったと感慨を述べ、北村さんも終戦で空襲がなくなるのでほっとした話と、民間の人から食糧を求められた話をしました。

関東軍特別大演習の頃から旧満州に駐屯した高井さんは、終戦の知らせが届く前8月15日に^{こんしゅん}環春峠でソ連兵と戦って右肩に盲貫銃創を受け、さらにシベリアに抑留されて鉄道建設に従事させ

られたとのこと。

フィリピン残留の藤木さんが終戦を知ったのは昭和20年10月中旬、その通知に行った先の部隊での話が衝撃的でした。

「どうしても思い出すが、終戦の通知を山の中の2キロくらい離れた部隊に通知しに行く命令を受けて行ったんです。そうしたら、その部隊は初年兵が多くて、何か食物を泥棒して食べたんです。それが見つかって、僕が行った日に銃殺の命令が出たんだって。僕らがせっかく終戦の知らせを通知に行ったのに、ご飯をちょっと泥棒しただけで銃殺なんてあんまり良くないでしょ。ちょっと話したんだけど、幹部候補生、下っ端でしょ。だから全然聞いてくれないでしょ。それで帰るまでの間に、『ダン』と(銃殺が)やられちゃった。だから、終戦のとき思い出すと10月のそのときのことが一番こたえちゃう」。

海軍の一部士官達が徹底抗戦のビラを撒いたことは福島さん、黒瀬さんの話にありました。

黒瀬さんたちが内地帰還後配属され、終戦を迎えたのは埼玉県の高萩飛行場。戦後、坂戸市の大榮寺に戦隊の生存者の方たちが「納翼の碑」を建立しています。



座談会を終えて

(司会の富澤さんの感想)
「柏飛行場やフィリピン戦線などの貴重なお話をたくさん伺うことができました。

私はまだ若い世代ですけれども、こういう戦争を体験した方々の貴重なお話を次の世代に語り継ぐことが平和に繋がる第一歩なのではないかと思いました」。(森)

徳満寺（布川城址） の地蔵市を訪れて

文・写真:会員 若山 善幸

12月2日（日）に印西市立中央公民館5Fで開かれた印西市教育委員会主催の考古学公開セミナーに参加する際に午前中若干時間が有りましたので、印西市中央公民館から車で10分程度の距離に有ります、利根川対岸の茨城県北相馬郡利根町布川の徳満寺（布川城址）の地蔵市に寄ってきました。



<門前の本堂・地藏堂に向かう石段>（昔はこの下に寺が有ったと伝えられています）

地蔵市では当日、年に1度の地蔵菩薩（高さ2.2m）の御開帳が行われていました。

徳満寺に移されて300年以上経ちますが、素朴で柔和なお顔のお地藏様です。

「徳満寺域は、戦国武将豊島氏が中世紀末期に集めた府川城址です。

現在の『布川』の表記は近世になってからのものです。

これまで布川城は『豊島頼継、頼重、明重3代の居城』とされてきましたが、市川の豊島家子孫に伝わる『豊島家系図』によれば、南北朝時代の応安2年（1369年）には既に府川

に城を築いていたと記されています。

徳満寺境内の西に空堀と土塁、北に徒歩坂等の一部が現存しています。

また徳満寺（真言宗）の地蔵菩薩は『子育て地蔵』とよばれ、元禄時代に京都の六波羅密寺より勧請したもので身丈2.2mの立像です。」（以上、利根町ネットワーク協議会のパンフレットより）



<地藏堂正面>（裏側に城址の空堀、馬出し、土橋が有り）

当初、徳満寺は今の門前に寺は建てられていたようですが、豊島氏が慶長の乱（1600年）で滅ぶと城跡（現在の場所）に移されたようです。

地藏堂が建立されてから年に1度の御開帳の際に門前に市が立つようになり、「利根川図志」（赤松宗旦）にもその当時の賑わいぶりが記されています。

住職のお話では昔は門前から布川の町外れまで市が立ち芝居小屋まで出たようですが、現在は都市化の波に押しされ、昔の賑わいがなくなったそうです。

近隣の住民の皆さんが今年誕生した子供や孫の健やかな成長を祈り地藏堂に多数の鏡餅がお供えしてあります。



根戸の高射砲連隊跡 歩哨舎移設完了

柏市根戸には、日中戦争当時から太平洋戦争開戦後まで、陸軍高射砲第二連隊が駐屯していました。高射砲第二連隊が東京に移転してからは、東部83部隊（歩兵）と東部14部隊（工兵）が同じ場所に入りましたが、営門などは元のものが使われていました。場所は、布施入口の交差点付近にありました。戦後営門は高野台の児童公園に移されたのですが、歩哨舎は放置され、見かねた東部14部隊の元軍医、故馬場一馬先生が自宅に移設していました。

その故馬場一馬先生宅に保管されていた歩哨舎が昨年12月26日に高野台の児童公園に移設され、このほど設置工事が完了しました。



<移設された歩哨舎>

移設設置費用は、当会からも40,585円を皆さんの募金をもとに柏市に寄付しております。なお、柏市からは当会の寄付に対して、お礼状が贈られました。

営門や歩哨舎は、兵営と外部との境界であり、兵たちの出入りを厳しくチェックするための施設でした。そんな戦争遺跡を保存することも、平和への願いを形にあらわすことではないかと思えます。

手賀沼が海だったころ

HP もどうぞ⇒ <http://www.matsugasaki-jo.net/>

手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会会報 第24号 2013. 2. 15

発行人：森伸之 編集人：藤田理恵子

年会費2千円 振込先：千葉銀行 柏支店 口座番号3461475